

山崎郷土叢書

NO. 122

26.3.10

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大谷 司郎

城下町山崎の成立の頃

大谷 司郎

一、はじめに

昨年の宍粟市の広報十月号から十二月号まで三回連載で、広報最終ページに「宍粟歴史再発見」と題して同テーマの記事を掲載させていただきました。今回の会報に紙面をいただき、その内容を若干補強させていただきました。当地の近世の始まりから中頃までを時系列で記してみます。特に今年は、「軍師官兵衛」の影響もあり、地域の歴史に関心が高まるものと期待しています。

二、宍粟藩の成立まで

天正八年（一五八〇）五月、長水城が落城したあと、宍粟郡は神子田半左衛門正治が領することとなりました。この神子田は尾張国生まれ、信長から続いて秀吉の家臣となり、三木合戦の功で

目次

城下町山崎の成立の頃	大谷 司郎	1
篠の丸登山	浅田 耕三	5
山崎闇齋先生と闇齋神社	鎌田 裕明	7
やまさきもみじ祭り		
「歴史ガイド」に参加して	河本 雅視	9
研修旅行紀行	浅田 茂樹	11
中世の城郭を訪ねて		
篠ノ丸大手口周辺の探索	竹内 克司	13
花を食う	里見 亘	15
揖保川高瀬舟の舟着場	会報部	16
事務局だより		17
編集後記		17

当地に領地を得たといわれています。その後、天正十二年（一五八四）七月に黒田官兵衛孝高が「播州宍粟郡一職」を与えるので領知せよという一書を秀吉からもらって当郡を拝領しました。官兵衛が大名として初めての領地が宍粟ということです。元禄十二年（一六九九）に著された『播州宍粟郡守令交代記（以下Ⅱ守令交代記）』には、「役人、奉行当地に居住せりといへり」とあり、官兵衛自身が山崎の地に居住した跡を確認できるものがありますが、篠ノ丸城の麓付近の居館跡に役人たちが居住したであろうと考えられます。官兵衛は宍粟の領主となったその三年後の

天正十五年（一五八七）七月には、九州豊前国中津に十二万石の大名となってこの地を去りましたが、宍粟は官兵衛の「ふるさと播磨」の最後の土地であり、その飛躍への大きな足がかりとなった地といえます。

官兵衛の後は、龍野城主の木下勝俊の支配を受けることとなります。勝俊は、

秀吉の正室北政所の甥にあ

たり、宍粟郡を領すると、山崎村を新町とする判物（山崎八幡神社蔵）を出して、村を町に発展させる通知をしました。この判物には、年号の記述がありませんが、勝俊が宍粟を領して間もない頃とみられています。その内容は、「山崎に新町をつくるから、移り住みたい者は住んでもよい。ただし、元の田畑を荒らしてはいけない。他所より移住する者には諸役を課さない。」というもので、町場形成を促す根拠となる貴重な判物といえます。

当時の山崎は、篠ノ丸山の南麓に東に山田村、西に山崎村という二つの村があり、ここを郡の中心地として町並みを作り、はじめて山崎町、山田町を一筋とする新町が形成されていきます。

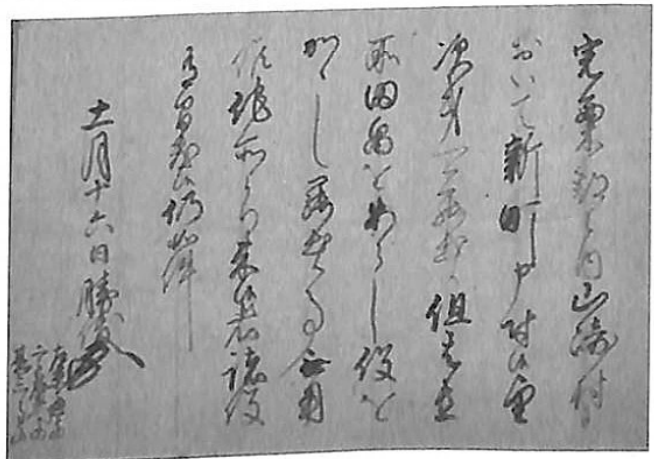
その後、慶長五年（一六〇〇）に関ヶ原の合戦の功で、姫路城



篠ノ丸城址石碑

主となった池田三左衛門輝政が播磨五十二万石を領した時、当郡もその領地となります。郡の代官として中村主殿助正勝が任命され、代官屋敷が山田町にでき、そこを「御茶屋」と呼んだと『守令交代記』にあります。輝政は慶長五年に市日を定める判物（山崎八幡神社蔵）を出して市場の隆盛を促しました。この二つの判物はかたや人家を集中させ、かたや経済活動を活性化させるという城下町の礎を作った貴重な史料といえます。

慶長十八年（一六一三）、姫路城主の池田輝政が病没し、嫡男利隆が四十二万石で跡を継ぎます。西播磨三郡（宍粟、佐用、赤穂）十萬石は輝政の次男忠継（岡山藩主）の所領に加えられます。二年後の元和元年（一六一五）、忠継が没し、子がなかったため、弟の忠雄（輝政の三男）が継ぐこととなりますが、西播磨三郡は忠雄の願い出が受けられ、その弟三人に分与することになり、輝澄（四男）に宍粟三万八千石、政綱（五男）に赤穂三万五千石、輝興（六男）に佐用二万三千石が与えられました。幕府は、家康の外孫であることを考慮して、それぞれ一家を興させたようです。



木下勝俊新町申付けの判物

三、宍粟藩の成立

輝澄は慶長九年（一六〇四）に姫路城で生まれ、幼名を松千代、同十四年（一六〇九）駿府城において家康に謁し、松平の称号を授けられ、また、元和元年（一六一五）に、石見守に任ぜられ宍粟郡を与えられました。

ここに宍粟池田藩が成立し、藩主松平石見守輝澄が山崎の地に居城をかまえ入封します。この時に、はじめて宍粟藩の独立をみます。山崎は宍粟郡内の谷々が集まる扇の要のような地理的好位置にあり、木下勝俊の出した「新町申付け」以来、人馬の往来も盛んな町となりつつありました。居城は天文年間（一五三二〜五四）に尼子勢が砦を構えた地（現山崎小学校周辺）に定め、屋形を造営します。山崎が城下町として出発した時といえます。

武家屋敷は屋形の北・東・西の三方に配し、更にその北方の山裾に町屋敷をつくり、商工業者の居住地としました。町場と武家屋敷の間には外濠を設け、土塁や石垣を築き、境界を厳重にしました。

ちょうど来年の二〇一五年が、宍粟藩が成立した元和元年から四百年の節目の年となります。『守令交代記』には「ここにおいて工商の人來たり集まり、町数、漸次広がり、ついに十町に及びぬ」と当時の町場の広がり記されています。

輝澄時代のものとして残っているのが青蓮寺です。このお寺は元々姫路城下にあったもので、元和四年（一六一八）この地に移っています。輝澄の祖母蓮葉院一家康の側室西郡（にしのおり）

の局の菩提寺であり、また、輝澄の母督姫（家康の子）良正院の菩提も弔っています。本堂の西側にある御廟屋（おたまや）は蓮葉院の位牌殿です。

寛永八年（一六三一）輝澄の弟政綱（赤穂藩主）が没し、その弟輝興が佐用から赤穂に転封され、佐用二万三千石が輝澄に加封されたことにより宍粟藩は六万一千石となりました。城下町も西側に佐用町（西新町）ができ、一層の賑わいを見せます。

また、加封により家臣も増えていきましたが、寛永十五年（一六三八）新参の小河家老系の小頭と古参の伊木家老系の足軽との口論がきっかけとなり、それが表面化して両家老の反目となりま

す。輝澄は病のため江戸住まいであり、国許の騒ぎを収めることができず、遂に伊木家老と古参派の十一人が家族もろとも集団脱藩する事件に発展しました。

幕府は家中騒動を理由に寛永十七年（一六四〇）輝澄を鳥取藩に「お預け」とし、藩主輝澄は二十五年間で宍粟の地を去ることとなります。徳川幕府が大名統制を強める時期で、輝澄の改易は恰好の口実となったといえます。



西郡の局の御廟屋（青蓮寺）

輝澄が因幡国鹿野へ蟄居となった後へ、和泉国岸和田から松井康映（やすてる）が藩主として入封してきます。六万石の内佐用の一万石を弟たちに分与したため、五万石の領地となります。康映の祖父康親は三河国生まれで、家康に従って武勲を立て松平姓を許され、さらに家康の康の字をもらい、以後、代々康を通字として名乗りました。

山崎に入封した松平周防守康映は町の東・西・北に入口の木戸の設置や、侍町と町場を区分けするため土橋門・大手門・角鷹（くまたか）門を設け、番所を置いて門番を居住させました。

『守令交代記』には松井の家風を、「戦国の余風にや、質素の風ありて、武勇、自然のたしなみありて……且、礼文の風あり。」とし、武道が盛んで、武骨のきらいはあるが、礼儀正しく、領民への善政を敷いたことが記されていて、その様子を同書には「当地の繁栄、この時にあり」とまで、著者の片岡醇徳は形容しています。

その康映は、慶安二年（一六四九）石見国浜田へ所替えになり、この地での統治はわずか十年で終わります。

同年に岡山藩池田氏から宍粟藩初代の藩主池田輝澄の長兄利隆の次男になる備後守恒元が、前藩主康映の五万石の内、千種川流域を除く三万石の領地を受けて入封します。この時点で、宍粟郡の一円支配は終わり、千種川流域は幕府領となります。恒元は父利隆の戒名・興国院殿をとって上寺の空き寺を興国寺とし、菩提寺としました。恒元は寛文十一年（一六七二）に没するまで二十

三年在任し、民生の安定に努めたとあります。荒廃していた播磨の一の宮である伊和神社に祖父である輝政が寄進していた社領と屋敷に加えて、田畑屋敷二町余を寄進し、神社の復興に寄与しています。また、氏神である山崎八幡神社も池田氏の保護を受けて再興していますが、中でも恒元は社領や楽器武具類などを六度にわたり寄進しており、再興に大きく貢献しています。領内の検地を行い、村・町場の整備を進め、生産向上のため道路の整備や、井堰の整備、山林の保護を図って、民衆の生活は安定したとあり、この頃のことを『守令交代記』には「惣じて、家中理不尽の風なし。町・在安楽せり。」と評しています。

恒元の跡を嗣子の政周（まさちか）（後に政元）が継ぎますが、六年後の延宝五年（一六七七）に江戸で没します。政周には後継ぎがなく、養子に次郎丸（数馬Ⅱ恒行）を迎え、家名と藩地が相続されました。池田数馬は齢わずか六歳で藩主になったのですが、翌年に江戸で亡くなり、宍粟藩池田氏は断絶となりました。

四、山崎藩の成立

延宝七年（一六七九）三万石は幕府領となりますが、その六月に一万石余が大和郡山の本多政貞（改メ忠英）に与えられ、同年十月にこの地へ入ってきました。この本多氏は「本多氏中興の主」といわれる平八郎忠勝が有名で、忠勝は若くして徳川家康に仕え、徳川四天王の一人と呼ばれました。この本多氏が、初代忠

英から八代忠鄰（ただちか）が明治維新を迎えるまで一九〇年間続くこととなりました。

宍粟郡内には幕府領が多いですが、元禄十年（一六九七）に三日月藩ができ、郡内で一八カ村が編入され、つぎに、享保二年（一七一七）には安志藩が成立し、一七カ村が編入、また、明和六年（一七六九）には尼崎藩領ができて、三二カ村が編入され、幕府領と複数の藩領が複雑に入り込む分割支配が明治まで続きました。

篠の丸登山

浅田 耕三

NHK大河ドラマ「軍師 官兵衛」の放送予定が発表されてから、姫路を中心に播磨は官兵衛ブームに沸き立ち、右を見ても左を見ても官兵衛さんの大合唱である。

そんな折も折、会報部長さんから黒田官兵衛に関連した何かを書くようにといわれた。ここにきて時流にのった駄文を弄するのは、少々軽躁の風がないでもないけれど、元々軽兆浮薄の徒ゆえ、いさんで山の賑わう枯木の一篇をものにしてみようと思う。

七、八年前の初夏のころであった。東京の新人物往来社の足助

さんという方から電話があつて、午後二時半頃に山崎へ着き、篠の丸の城跡へ登る予定だが、よかつたら一緒に登りませんか、といわれた。

足助さんとはそれまで面識はなかったが、時々原稿の依頼を受けて、その度に手紙や電話のやりとりをしていた。

バス・ターミナルで待ち合わせ、近くのコーヒーショップで一服したあと幼稚園の東の道から登り始めた。足助氏には高砂の村井さんという方が同行しておられ、村井さんは長水城や篠の丸へはもう何度も登られているとか。

出版社が戦国時代の軍師たちを『別冊歴史読本』で特集するとかで、黒田官兵衛もその一人のため、ゆかりの姫路や三木などで足助氏は取材したあと山崎へ足をのばされたという。

中腹の千畳敷に立寄ったり、歌碑を眺めたりしてゆっくり登った。

頂上の遺構は足助氏の想像より削平地が広く大きかったらしい。南と西は濠切の内側に土塁をめぐらしていたのだろうが、その跡が盛り上がりつつ防禦の意図が歴然としている。

眼下の展望は残念ながら立木に邪魔されて殆んどきかない。

三人でどんな話をしたか、細かな事は忘れてしまったが、断片的な記憶は残っている。

黒田家は近江から備前邑久郡福岡村に移住したが備前に戦乱がつづいたため播州に移り広峰神社の神官と知り合つてそのすすめ度で神社のお札と一緒に家伝の目薬「冷珠膏」を売ってもらつた。

その目葉が評判になり思いがけぬ財をつくった。その時の黒田氏の当主重隆（官兵衛の祖父）が目端の利く人で財力で人を集め豪族となり、御着の領主小寺氏の重臣となった。

官兵衛の軍略才能は、武士階級の堅苦しい常識や社会通念にとられない商人らしい自由で実利的な着想から生まれたと私は多分、そんな自説をしゃべったと思う。

熊見満景の碑のほりは下から吹き上げる風が心地よい快晴の日で、そこに座りこんで話した記憶がある。

備中高松城の水攻めや中国路の大返しなど何とも人の意表を突く戦略が秀吉の才知だったか、官兵衛のそれだったか、多分二人の合作だったろうがその気宇の壮大さ、着想の奇抜さは常人にはないものであろう。

おもしろいのは四国征討の際の付城戦法である。向城ともいつたそうだが、攻略する敵城の天守閣や楼閣と同じ高さの櫓を敵城のすぐそばに建て、その楼上で味方に歌舞音曲をやらせたり酒宴を張らせたりした。

長期戦、特に兵糧がかつかつの籠城兵などはすぐそばでこんなことをやられたらたちまち士気が萎え、戦力はガタ落ちになることだろう。ユニークな心理作戦だが、黒田官兵衛嚆矢の戦術かどうかは詳らかでない。しかし、官兵衛の思いつきそうな戦術である。

黒田官兵衛という人物は近代人だったのだと私は思う。夫人一人を生涯愛し、他の妻妾をもたなかったというのも、戦国武将と

して他に殆んど例を見ず（僅かの例は上杉謙信と高山右近ぐらいか）これは近代人の感覚であろう。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の際、九州全土の席捲をはかったのは、目の前にころがった絶好の賽の目に勝負師の血が思わずさわいだけで、はたして天下を狙う意図があったかどうか、そのような野心家ではなかったのではないか、と私はそんな気がする。もし官兵衛が天下へ野心をもつ冷徹なリアリストであったら、有岡城の地下牢につながれて生涯の跛行者になるようなへまはやらなかったろうし、小田原城へ単身のりこむような冒険もしなかっただろうと愚考するがいかがであろうか。

お二人を相手にそんなことを話しながら登山道を下った。その年の秋、『山本勘助と戦国二十四人の名軍師』が新人物往来社から発行され、その中で「黒田官兵衛」を十六ページ（4割はグラビア）分執筆させてもらった。

さらにその翌年の夏は同社から『稀代の軍師黒田如水と一族』がでてその中で「有岡城幽閉と救出劇」と題する一文六ページ（4割グラビア）を書かせてもらった。

二冊共市立図書館に掲示してもらっているので興味ある方はご一読いただきたい。

「山崎闇齋先生と闇齋神社」

『大学』講義、「孔孟の日本侵攻」、「夢」について

鎌田裕明

闇齋神社がウォークラリーや街歩きスポットとして位置づけられ、闇齋研究会として対応するようになってから二年が経過しました。機会を得たので参観者に対する案内の概要をまとめ郷土研究会会員の参考に供します。

来場者への案内概要

- 一 山崎町と山崎闇齋先生 闇齋先生『年譜』に基づき木下家定に仕えた祖父浄泉以来のかかわり
- 二 闇齋先生の生涯 土佐藩家老野中兼山や三代將軍の弟会津藩主保科正之との親交など
- 三 闇齋神社の縁起（おこり） 山崎町旧跡保存会による昭和一五（1940）年の建立
- 四 闇齋先生への評価 丸山真男、田尻祐一郎、徳富蘇峰、小室直樹、植村和秀、原念齋等による評
- 五 闇齋先生の学問 『敬齋箴序』 『大学垂加先生講義』 など
- 六 『天地明察』と闇齋先生
- 七 神社境内の碑文、記念碑及び楷の木並びに「山崎闇齋先生座像」

以上は「山崎郷土会報」117号・121号及び「闇齋神社と山

崎闇齋について」1〜3号で紹介したところです。

本稿では以下の三つのテーマについて記します。

八、闇齋先生の『大学』講義 学びのカリキュラム

闇齋先生の時代の学びはどんな形で、どのぐらいの量をこなしていたのか、について『大学垂加先生講義』註1により紹介します。講義を始めたのは、延宝七年己未十一月七日とあり、続いて十三、十六、十九、二十二、二十五、二十八、十二月一日と続いている。そして、十一月十九日で経一章までが終わったとあります。

大学章句序から経一章までは、文字数は章句九百四十五字（二十一行×四十五字）、経一章は二百七十字（六行×45字）計千二百十五字。これを四日間で講じていることになり、一日に三百字余りの講義とはどんなに密度が高く、厳しいものであったか、思わず襟を正します。

霜月下旬の寒冷の頃、木枯らし吹き込む教場で連続三時間の講義、講じる闇齋先生、時に六十二歳、二年後に鬼籍に入る、そんな年齢でありました。江戸時代林田藩の藩校敬業館や八鹿の私塾青溪書院の板張りに壁のたたずまいを思うと弟子たちの精神の強さや心身の強靱さに打たれます。

九、日本民族の自立と誇り

闇齋先生が弟子たちに「今もし中国が、孔子を大将とし孟子を

副将として数万の騎馬を率いて日本に攻めてきたならば、我々のように孔孟の道を学ぶものはどうすればよいか」と問うた。分らないと答えた弟子たちに閻齋先生は次のように語った。「不幸にしてこのような災厄に遭ったなら、我々は身に鎧を着け手に武器を執って彼らと一戦し、孔子・孟子を虜にして国恩に報いるより外はない。これこそが孔孟の道である。」註²

この挿話は、「国家主義」とかウルトラナショナリズムと誤解されやすい面があります。孔孟の道や、儒学の正しい精神は戦いになじみません。戦いの悲惨は戦士は勿論多くの人々の命を奪い、民に塗炭の苦しみをもたらすことです。民が治世の中心であるのは孟子の「民を貴しとなし、社稷これに次ぎ、君を軽しとす。尽心14」、孔子の「政は徳を以てす。為政二の1」に明らかです。また、「孔子や孟子が日本攻略の将になる」という仮定についても孔子の「政の基本は食料を十分にし、兵を十分持ち、民が政に信を置くこと。三つのうち始めに捨てるのは兵、次は食……顔淵の7」や「君子は正義を以て本質とし、礼に従って実行し、謙虚な言葉で言い、信義を違えない、衛霊公の18」によれば、見当外れです。

国恩に報いるという場合の國は前述した君子が民を第一として治めている国であり、国民の命を守り暮らしを高めるものです。閻齋先生は、治者の政治的使命を述べたうえで、不当な侵攻には「武器を執って闘う」と語っているのです。

十、閻齋先生の夢にかける思い

閻齋先生についての書で、夢について特別取り上げている論考は見当たりません。しかし注意して『家譜』や『先哲叢談』を読んでいくと次の1〜3のような例があります。註³

夢の意味と解釈については、河合隼雄氏の次の論述が参考になります。「意識のあり方が夢に影響を与える、同時に夢が意識のあり方に影響を与える。かくして意識と無意識の相互作用によってそこに意識のみの統合を越えた高次の合理性への志向が認められる。」註⁴

「自らの夢に注目し、自我のあり方と照合し、意味を悟り、生き方を改変していく」註⁵ 高次の合理性への志向や生き方を改変する契機を踏まえて閻齋さんの夢を省察すると、閻齋さんの姿が生き生きしてきます。

1 閻齋さんの母が見た夢、「比叡坂本にお参りし、鳥居前で拝している時、老翁が梅一枝を折って母に与えた。母はこれを左の袖に納め、みごもった」神意の夢見という類型にあたり、梅は霊木、翁は神のシンボルとされています。

2 閻齋さんが三十三歳の時、九月二十五日の朝、父が見た夢「神が私を今よりは忠平（真心とまっすぐなという意味）と呼ぼうとおっしゃった。」と語った。二日後、閻齋さんが七つの文字の夢を見た。「幽都、明都、幽明室（目に見えない幽世、目に見える現世、この二つの世がつながっていること」。

3 閻齋さん三十四歳の時 周子の書を編纂していて、まどろん

だ時、夢に周子を見た。「朱子の解釈は尊意に違わないか、と問うた。違わない、であった。また、『太極の図の第一圈に点を打って尊意に違っている者がいますが』、に周子は領いた。「死の二年前、『周書抄略』を書く時、この夢を思い出して点をつけなかった、と闇齋は日記（『文会筆録』）に記しています。夢に見るほど考えつくし、正しい解釈に達していたことに驚きます。

註

1 山崎闇齋 『大学垂加先生講義』岩波・日本思想体系31

10～66頁

2 『先哲叢談』 原念齋著 源了圓・前田勉訳注 平凡社一九九四年版。山崎闇齋の条108～124頁。

孔孟の侵攻は118頁

3 『山崎家譜』 山崎闇齋、『闇齋先生年譜』 山田連思叙述 明徳出版昭和六〇版の『山崎闇齋』巻末に掲載

岡田武彦著夢の1は186頁。夢の2は187頁。

夢の3は189頁

4 河合隼雄 河合隼雄著作集巻9 『仏教と夢』二七頁 岩波書店一九九四年版

店一九九四年版

5 河合隼雄 『前掲書』23頁

前回「敬」が闇齋学のキーワードと紹介したところ、会報部長の片山昭悟氏から、奈良時代の代表的な鏡「伯牙彈琴鏡」の銘帯に「照心照胆保千春璣」とあること、及び敬との関わりや文字

の使用例について貴重な示唆を頂きました。記して謝意を表します。

やまざきもみじ祭り 「歴史ガイド」に参加して

河本雅視

平成二十五年十一月二十三日～二十四日の二日間、紅葉山でもみじ祭が開催され、その一端として山崎郷土研究会の会報部のメンバーも加わり、山崎町の歴史ガイドをすることになった。

山崎のもみじ祭は近年テレビ放映の影響もあって、広く阪神間からも参観に来られるという盛況ぶりである。

そこで、これらの人達に少しでも山崎の歴史や文化を知って頂くとうとガイドポイントを設けそこで解説する者と、そこまで誘導する



山崎歴史郷土館内

者とに分けて案内することになった。

私達二名は歴史郷土館を受け持ち、図書館の二階にある歴史郷土館へいく。館内は山崎町の縄文時代から江戸時代に掛けての山崎町の歴史が展示してある。

受付の椅子に腰掛け、いくら待っても来客はなかなか来てもうえなかったが、館内のトイレを拝借に時々来られる人があった。この人達にと考え、短時間に説明出来るように三点のポイントに絞り、一点は兵庫県指定文化財の青木銅鐸を中心に古代の説明、二点目は鹿沢城（山崎城）の絵図をもとに城と城主そして城下町等について、三点目は闇齋像を前にして江戸時代の偉人闇齋そして、闇齋像の由来、また、山崎町との関係を簡単に話そうと思っ

た。しばらくして、そこへ三人連れのご婦人が見え、今から紅葉山へと言われたが、出来ればほんの少しの時間、山崎町の宝物を見て行かれませんか、と言うとOKがでて案内する。

まず青木銅鐸の前へ行き、昭和三十五年青木で、戦後、丘の上を開墾されて作られたかどうかで働いていた人が、もう少し下へ荒れ地を拡張中に発見されたもので、今兵庫県の文化財に指定されていることや、発見者は故人谷林新さんであることを告げるとビックリされ、「新さんは親戚です」と言われ、熱心に聞かれた。

これは今から二千年も前の、丁度紀元元年頃を中心に四百年間ほどの短い期間だけ使われていたことや、日本にしか無く、また発掘数も五百程で少なく、しかもどんなことに使われたかも分から

ないが、研究上では共同体の祭祀に用いられたらという、歴史上非常に不思議なそして貴重なものであることを説明すると、「そんなこと新さんから何も聞かなかったなあ」と言っていて感心しながら帰られた。

次は鹿沢城の絵図の前での説明で、小学高学年の子供連れの祖母を含む四人家族であったので、その子にも分かるように思い、子供の顔を見ながら、本丸の話、そして幅が一メートルもある内濠（堀）があった事などを話していると、お祖母さんの方が、実は私は山小の卒業生で、と、濠のことや、その横に忠魂碑があった事、また紙屋門が校門であったこと、そしてまた東北の隅に隅櫓があった事など懐かしそうに思い出され、またこ

ちらから城主のことや石高のことを話すとそんな立派な城だったんですね、と感慨深そうな顔をされていた。ところがご主人の方は何時の間にか先へ進まれている説明の難しさを感じた。

山崎闇齋像については、闇齋は江戸時代の偉人であり、山崎町との関係では闇齋の曾祖父や祖父が山崎町



山崎闇齋像

に在住し、姫路城主木下家定に仕えていたこと、そしてまた、この像の由来などを話そうと思っていたが、戦後は閻齋の知名度は低く、殆どの人に知られていなく話すのが難しいと思った。予定では前もって閻齋神社に参拝され、そこで閻齋について説明を十分聞かれた上で郷土館へ来られ、この像の由来の説明になるので、もっと興味をもって聞いて頂けたと思う。

今回の歴史ガイドを通して感じたことは、人の気を引くことの難しさだが、不思議なことに館内で何人かに説明をしていると、はじめは素通りしていた人達も、次に来られた人達は何だろうと寄って来られることである。しかし、人それぞれで、三人三様、しかも年齢差があり、今回のような場合の説明は難しい。しかしこんな事も考えた。その人の何らかの過去との繋がりがあつた話は興味を持って聞いてもらえると、言うことである。そしてまた興味を持ってもらえればその事が好きになるということである。

以上

研修旅行紀行

浅田茂樹

九月二十九日、山崎文化協会との共催による奈良方面への研修旅行があり、四十五人が参加した。その中には、歴史に造詣の深い人や旅慣れた人が多くおられ、いやが上にも会話が弾み、和やかな雰囲気にも包まれていて、初めての見学地に旅する私に大きな期待を抱かせた。

車はインターを降りると、のどかな山野が続く田舎道を進んでいった。しばらくして、最初の見学地、「栄山寺」に着いた。

栄山寺は、養老三年（七一九年）に創建された真言宗豊山派の寺院で、本堂には黒漆塗り厨子の中に室町時代の作とされる薬師如来坐像が、脇侍に日光菩薩、月光菩薩などを配して祀られていた。そのお姿には、長い年月を経てもなお人々に平穏と安らぎを授けてや



栄山寺の国宝梵鐘

まない慈愛が満ち溢れていて、俗世を忘れてしばし安穩の境地に浸っていた。それについても、この仏たちも「菊の香や奈良には古き仏たち」と詠んだ芭蕉翁の足跡の中に含まれているのだろうかと思いが湧いた。

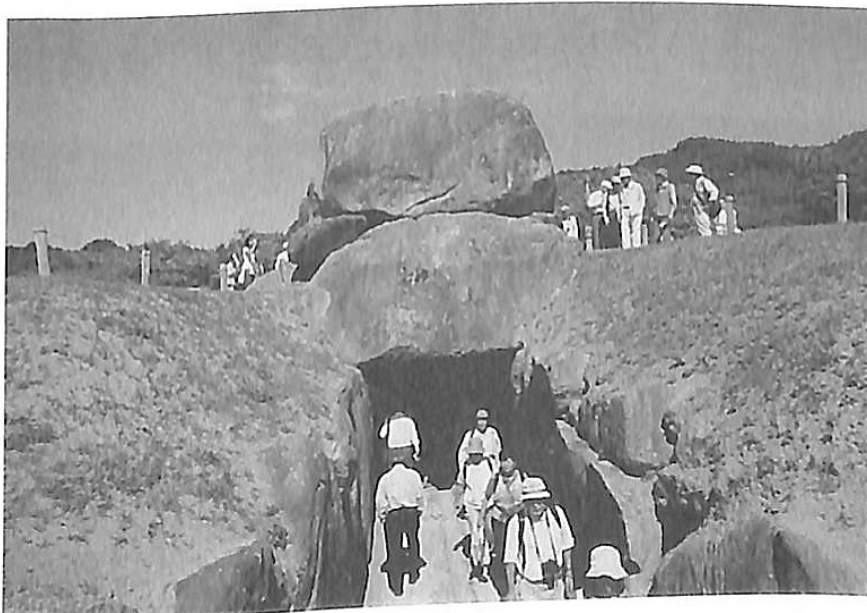
本堂を出て、木立の間をぬけると、京都神護寺の鐘と、宇治平等院の鐘とともに「平安三絶の鐘」として知られる国宝の「梵鐘」と、同じく国宝の八角堂があり、住職の説明を聞きながら、歴史の重みがひしひしと肌伝わってきた。こうした建造物がこの辺境の地に現存していることに驚きと強い感動を覚えた。

当時はさぞかし人々の往来もはげしく、にぎやかな風情をかもしていたであろうと想像しながら、権力の去った地域が、時代の移ろいとともに、元の自然へと回帰していく様を目のあたりにしたようで、かつて奥羽地方で栄華を極めた藤原氏一族の滅亡の後にとり残された金色堂の景色と重なって万感胸に迫るものがあった。

次に訪れたのは、古墳公園にある石舞台古墳である。この古墳の埋葬者は、時の権力者蘇我馬子という説が有力である。元は盛土の古墳であったそうだが、今は巨大な横穴式石室が露出していて、周囲とは不釣り合いな景観を見せていた。巨大な石の組合せから、当時の土木技術の高さが推測され、権力者の威厳とこれに携わった人々の苦勞が偲ばれるものであった。

最後は、我が国最古の歌集である「万葉集」を中心とした古代文化に関する情報や資料を収めた「万葉文化館」を見学し、帰路についた。

このたびの旅は、奈良県南部の万葉のロマンを感じさせるいろいろな所が見学でき、楽しく有意義なものとなった。お世話くださった方々に、心より感謝しお礼申し上げます。



石舞台古墳

中世の城郭を訪ねて

篠ノ丸大手口周辺の探索

竹内克司



篠ノ丸城鳥瞰

郷土の中世史は赤松氏及びその一族宇野氏の足跡でもあるが、篠ノ丸城、長水城の落城とともに消滅し、空白の歴史となっている。城主宇野氏の居館や揖保川流域を治めた政庁がどこにあったのかも不明である。その遺構の篠ノ丸城の南麓大手口の山崎八幡神社周辺を地名を手がかりに探ってみた。

門前に古代仏教寺院跡

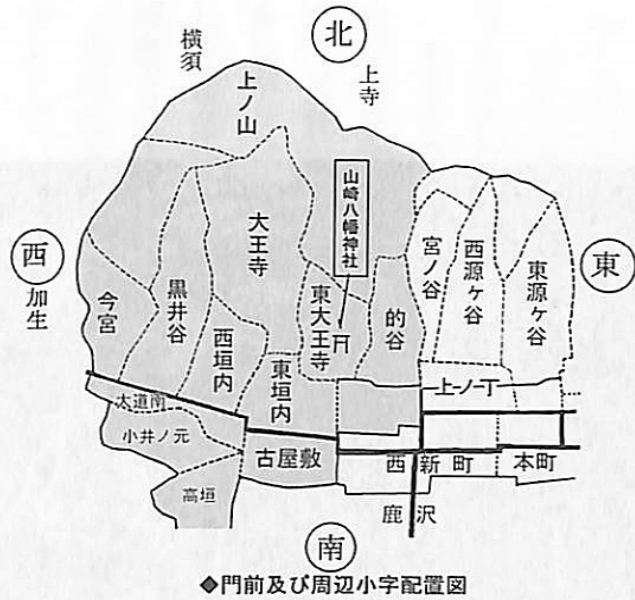
奈良から平安期に宍粟郡内に唯一古代仏教寺院が存在していた。それは「播磨千本屋廃寺跡」である。伽藍配置されたりっぱなものであったことが発掘によって証明されている。その廃寺跡の軒丸瓦と同種のもので、門前で発見されている。つまり門前にも古代寺院があったと思われるが、宅地化になった今ではその全貌は知る由もない。いえることは西播磨の北部宍粟市山崎町にまで仏教が浸透しその文化が花咲いていたようである。

門前の字限図が示すもの

現在その門前に山崎八幡神社が鎮座している。門前の地名由来で、神社の前なら宮前もしくは宮下ならわかるが、なぜ門前なのか前々から気になっていた。地名や城郭に興味をもち、城郭調査で入手した門前の字限図に記された地名とその位置に関心をもった。そして篠ノ丸城跡の山麓周辺の調査によって、一つの答えを導き出すことができた。

八幡神社の移転と宇野氏の奉納額

地名の位置関係は八幡神社からみて神社は字東大王寺にあ



り、東の字的谷のさらに東隣りに字宮ノ谷、西の谷に字大王寺がある。八幡神社は社伝によると応仁元年（一四六七）、加生（一部は門前）の今宮から門前村字東垣内に遷座したというが、それは字宮ノ谷

城跡の大手道にあり、周辺の遺構や地名考から宇野氏の菩提寺であった可能性がたかい。

いずれにせよ宇野氏ゆかりの寺社は秀吉軍により焼失し、そのあと神社が現在の地（字東大王寺）に移転・再建され、江戸初期より代々の藩主により手厚く保護されてきた。

門前の古屋敷とは

さらに字大王寺の南方に古屋敷がある。古屋敷は宍粟藩ができるまでの中世後期にはすでに町場化されていたと考えられ、門前の門は大王寺のことではないかとの結論に到るのである。

宇野氏の本拠は篠の丸山麓にあり、居館や寺社を中心に門前町が栄えていたのではないか。一方、篠ノ丸城の搦手口の横須には上屋敷、屋敷の字が残されている。城の搦手を守る屋敷があったのであろう。

歴史文化に関心と誇りを

篠ノ丸城跡が黒田官兵衛飛躍の地として注目されているが、赤松一族の宇野氏が篠ノ丸城・長水城を根拠に中世後期、赤松総領家をもしのご勢力を有し、西播磨八郡を支配した宍粟武士であり、社会、文化面で貢献してきたということを知る機会でもある。

大王寺は宇野氏の菩提寺か
 字大王寺は八幡神社境内の西の谷の今は杉林のうっそうとした段状の湿地で、戦前までは田んぼだったという。この地形をよく調べてみると寺院と僧坊跡ではないかと考えている。「大王寺」は地名にのみ残された幻の寺ではあるが、篠ノ丸

であったのだろう。

八幡神社に三十六歌仙図額が宇野村直より奉納されたことが近年発表された。それは八幡神社が宇野氏のゆかりの神社であったことや当時の山崎が文化豊かな地域であったことをうかがわせている。

これを契機に市民の多くが郷土史に関心をもち、貴重な歴史文化遺産を地域の誇りとして子に孫に語り伝えていくことが今宍粟市に生きる我々のすべきことだと思っている。

花を食う

里見 亘

わが家の裏の果樹園には、何時も十数羽の鶉ひよどりがきている。雑食種の鶉であるが、冬は食べ物が少ないので痩せて貧相な姿をしている。それでも鳴き声だけはピーピーと甲高く鳴いてうるさい。

二月になると、酸葉さいばや烏野豌豆くろのえんどう、菜の花などが芽をだすので、それを食べに来る。そうになると、羽の艶はだんだん良くなり、ふつくらとしてくる。やがて果樹園の端にある藪椿が咲き始めると、木に集って花の蜜を吸う。蜜を吸うだけでなく、花弁まで食ってしまう。

「花を食う」ということで思い出したが、日本人は花をよく食う国民らしい。私は、飛行機が嫌いだから外国に行ったことがないので、確かなことは分からないが、そのような話を聞いたことがある。そう言われてみると、確かに日本人は菜の花や菊の花を食べる。路の臺とうや茗荷みょうがの子なども、食べる花の中に加えてもいいであろう。

伊賀に、福森雅武という陶芸家がいる。その人の著書に『土楽食楽』（文化出版局）というのがある。食い道楽の著者が、身の回りにあるものを如何に美味しく食べるか、ということを追求めた書物である。その中に、面白い花の食い方がある

ので、そつとご紹介する。まず、堇御飯すみれである。炊き上げたご飯に軽く塩をし、それに堇の花を混ぜたものである。花の紫と飯の白とのコントラストが鮮やかなご飯であるが、私の食指は動きそうにない。次は、かしわの花山椒鍋。だし汁にかしわと花山椒だけを入れて煮るものである。これは美味しそうだ。播州地鳥を使ってやって見たい。もう一つ、これも変わったもので、南瓜かぼちゃの花の味噌汁である。朝、花の咲いているときに摘んで、熱い味噌汁の中に入れて食す。二日酔いに効くという。

ついでだから、山菜料理の本を開いてみると、野萱草のぐんそうの花の天ぷら、蒲公英たんぽぽの花の天ぷら・酢の物、甘野老あまのらの花の酢の物、葛の花の天ぷら・酢の物、蓮華草れんげの天ぷらなどが載っている。

このように並べてみて分かったことは、日本人は鶉に劣らず悪食だ、否、もしかしたら、鶉は風流な鳥なのかもしれない、ということである。

「揖保川高瀬舟の舟着場」

会報部

山崎町の今宿と出石で、国土交通省による揖保川の河川改修工事が行われています。

築堤という石積みの堤があり、高瀬舟の舟着き場で、六粟橋や対岸からも見えます。

江戸時代から大正時代に生産物流の集荷の拠点であったところで、揖保川を通して網干まで高瀬舟で運んでいたもので、当時の隆盛が偲ばれます。

かつて揖保川の兩岸の今宿と出石には問屋が一五から一六軒あり、問屋の蔵や石垣がありました。

舟着場跡や山崎藩本多家の浜御殿の石垣は、当時のまま残っています。

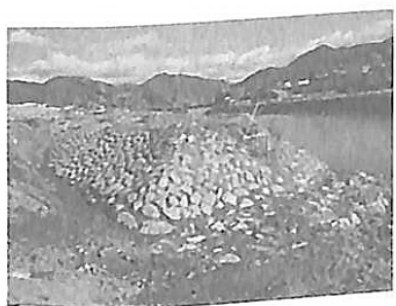
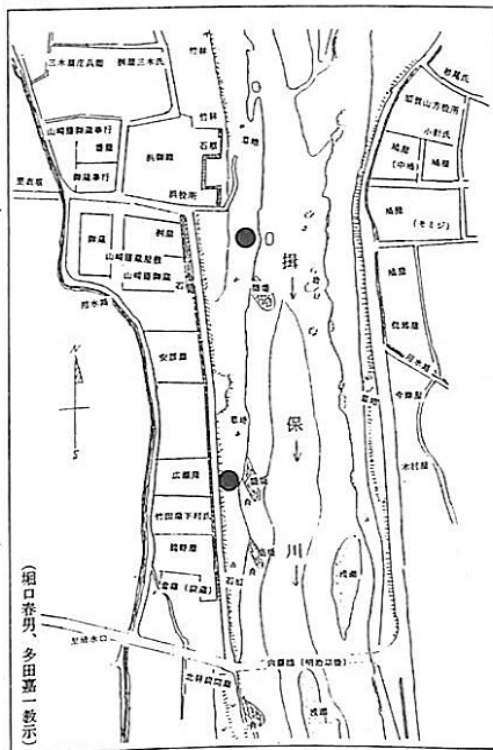
江戸時代の歴史を伝える郷土の資料として後世に残しておきたい貴重な生産物流拠点の資料です。

神戸新聞の一月一日付の記事で、石出しが保存されることになり、問屋街があった一帯は整地され、親水広場に整備されるについて、大谷会長は、「山崎の城下町の形成に寄与した舟着き場に市民の理解が深まればうれしい」とコメントをされています。

揖保川の高瀬舟については、これまで山崎郷土研究会で取

り上げておられ、宇野正碓先生、森本一二先生、堀口春夫元会長、高瀬舟関連で下村哲三さんも紹介されています。今回、宇野正碓「揖保川高瀬舟通運史の研究」『播磨学研究紀要 創刊号』播磨学研究所 平成七年（一九九五）

図(1) 出石河岸付近概念図 (河岸問屋及び御蔵配置)



(堀口春男、多田嘉一敬示)

事務局だより

平成二十六年郷土研究会総会のご案内

本会の総会を次のとおり開催いたしますので、お繰り合わせのうえ、多数の皆さんのご参加をお願いいたします。

日時 平成二十六年四月十三日（日） 午後二時より

場所 宍粟防災センター 四階 研修室

内容 事業報告、会計報告、事業計画、予算審議他

記念講演に替えてDVD「生野義挙150年 維新の先駆け」の鑑賞予定

このお知らせをもって、総会の案内とさせていただきますので、よろしくお願い致します。

編集後記

『山崎郷土会報 第一二二号』をお届けします。

『山崎郷土会報』は郷土の研究をすること。会員の皆様にわかりやすいものであること。山崎の歴史を調査と研究をすることを目指しています。年二回、八月と三月発行しています。専門的なことが多くて難しいとの意見もあります。今後は、身近な話題なども紹介したいと思っています。次回、会員の皆様の原稿を募集します。

NHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」が一月五日から始まっています。みなさんも楽しみに見られていることと思います。黒田官兵衛は、山崎とゆかりのあるところですよ。

『黒田家譜』によると、今から四三〇年余り前の天正八年（一五八〇）九月に一万石を与えられ、「山崎の城」に居たと伝えられています。十二年（一五八四）には羽柴秀吉から「宍粟郡一職」を与えられています。山崎は、大河ドラマの歴史の舞台でもあります。（片山昭悟）



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

まごころを伝えます。

一献献上 品質本位

地酒



確かな品質と味わい。



SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28



TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyohai.com HP http://www.sanyohai.com

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします



〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)
TEL(0790)62-7588
FAX(0790)62-0770



外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL②0036

伊沢の里

いつも伊沢の里をご利用くださいますありがとうございます。心から感謝を申し上げます。これからも、是非、お祝い、ご法要、ご会食、団欒など会席料理から鍋物、そして定食など、なんなりと是非お申し付けくださいませ。ご予算に応じて調理させていただきます。また、無料送迎バスもご利用ください。おいでをお待ちいたしております。

Tel.0790-63-1380 Fax.0790-63-0362

PHOTO-STUDIO
Meyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本店 TEL (0790) 62-0700
さつき通り FAX (0790) 62-2117
ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
山崎町中井 FAX (0790) 64-2052